

鎌倉時代漆芸技法資料 I 補遺

——梅蒔絵手箱 三嶋大社蔵——

中 里 寿 克

X線透視による構造と漆芸技法の解明

この手箱は保存が良好のため、外観からは素地の構造、蒔絵技法の工程等の情報はほとんど得ることが出来ない。しかし以前撮影したX線透視写真によって新知見を得、施工工程上の事実を補捉することが出来たので本文に付け加えておきたい。

X線透視による素地の構造は金地又平目地のために明瞭に透視していない部分も多いが、布着せは懸子と身箱については現状を知ることが出来た(図-1, 2)。これらの布着せはいづれも筋布着せで、箱四隅の柄組部、側板と底板の矧目部分に貼廻されている。各部共に内外に貼られる事は留意される。外側の布着せは長目の布を連続させるが、内側の

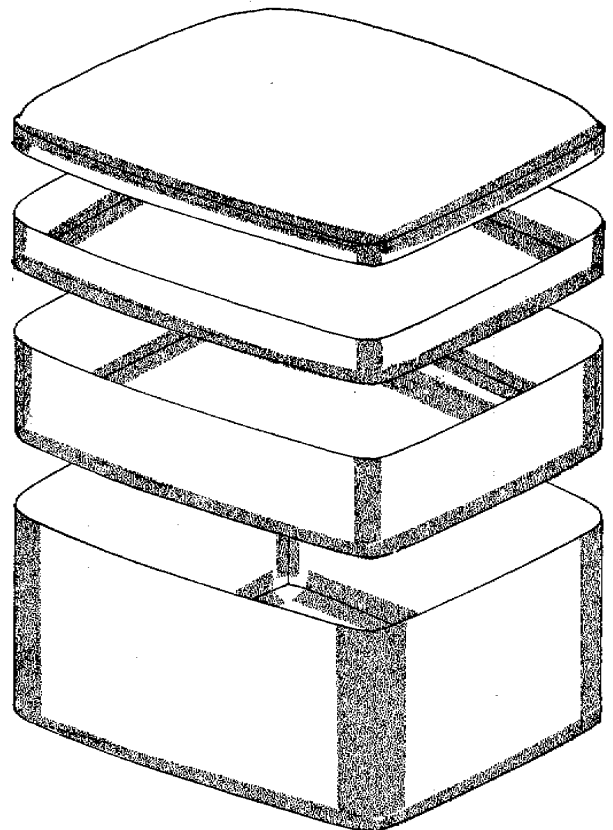
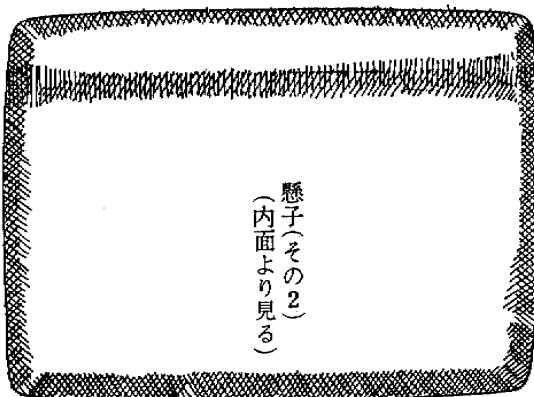
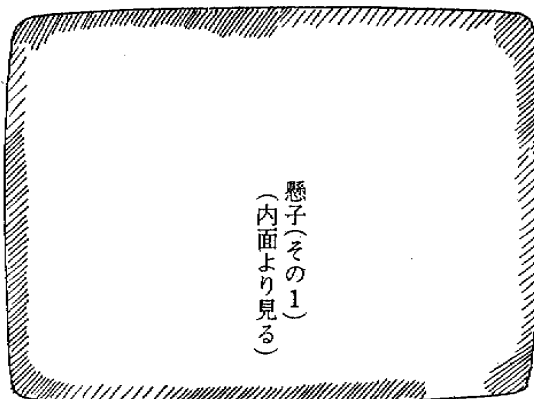
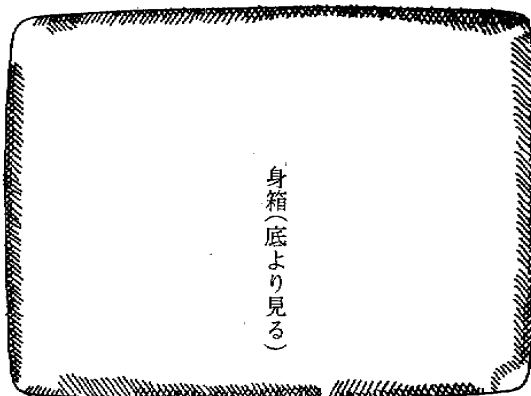


図-1 X線透視による布着せ図

図-2 布着せ現状図

ものは底面では各辺で貼継いでおり、四隅に継目が認められている。懸子（その2）の底板は幅5cm程の板を短いことがわかり、そこにも内外に筋布着せがある（付図—4, 6）。結句、X線透視による箱の構造の解明については、前記の懸子（その2）の知目を認めたのみで、特に四隅の柄組については金地又布着せが妨げとなって、いずれも明らかに出来なかった。

用材は桧と思われ、木目の詰んだ柾材である。

蒔絵技法でも高蒔絵と金地の関係において新たな技法を見出した。

甲面及側面に高蒔絵された多弁の梅花には、その内に単弁の梅鉢文が浮び上っていた（付図—8）。この部分はX線を良く透過させており、おそらく金地を画き残したために出来た映像ではないかと思われた。更に樹幹、飛鳥文の周縁にも不自然な濃淡が見えるので、あるいは同じく画き残しを行った可能性がある。

金地の上に蒔絵を行う場合には、経済的理由、あるいは工程上から意識的に金地を残すことは後世の技法でも一般的に行なわれており、この方法が高蒔絵濫觴時代まで遡ることは興味深い。この手箱の場合、樹幹、飛鳥文はかなり正確に画き残しを行っている様だが、梅花の場合は実際に蒔絵された八重梅文とは異なる単花文で残されたことは、あるいは下図の段階では、ここにも平文の梅花や小箱類の梅花文と同様単弁の梅を画く予定であったかもしれない。ただし小箱類については、まだX線透視を行っていないので、これらをどの様に製作したか、今の所不明である。

梅花文の平文については本文でもふれておいたが、平文の規格性はX線透視によって更に明確となった（付図—1）。一個一個の形状は極めて正確に歪みなく美事に切断されており、輪郭はいずれも曲線的で平滑である。個々の細部の形状は異なるものが多いので、いずれも同形とは云い難いが、ほぼ同寸の法量からみて形タガネの存在を否定出来ない。形タガネで形取り後、細部を整形したかもしれない。他に考えられる技法としては数枚を重ねて一度に糸鋸で切る方法があり、いずれにしても同形に切る技法が存在したに違いない。半花文、蕾なども輪郭は曲線的であり、ハサミで切った痕跡は認められない。

もっとも葦手風に嵌込まれた漢字の平文もその輪郭は極めて平滑に切られている。これらを形タガネで切る事は考えられないのだが草書体の漢字を鋏のみで切ることも不可能であろう。

梅花文と同様、ハサミで切ったものをヤスリで整形したのであろう。12世紀以前の平文遺品にはハサミ又タガネで切った痕跡が明らかな物が多いのだが、13世紀になって、技法が向上し、精密になったと思わざるを得ない。

以上が梅蒔絵手箱のX線透視による考察の概要であるが、布着せについては12世紀の筋布着せ法がそのまま継承され、この方法が極めて一般的であった事を改めて知ることが出来た。装飾法としての蒔絵技法は前代より大きな変革を遂げつつある時代だが、髹漆法はおそらくほとんど変化していないであろう。

12世紀になって蒔絵は2次限から3次限の世界へ進化して来たが、それに伴う技法も合理的に正統的に発展して来た経過をこの手箱の高蒔絵の技法に見る事が出来るのは幸運である。ここには高蒔絵揺籃期の混乱はまったく見ることが出来ないばかりか、今日まで良好な状態を維持させて来た作者の力量は驚異としか云い様がない。

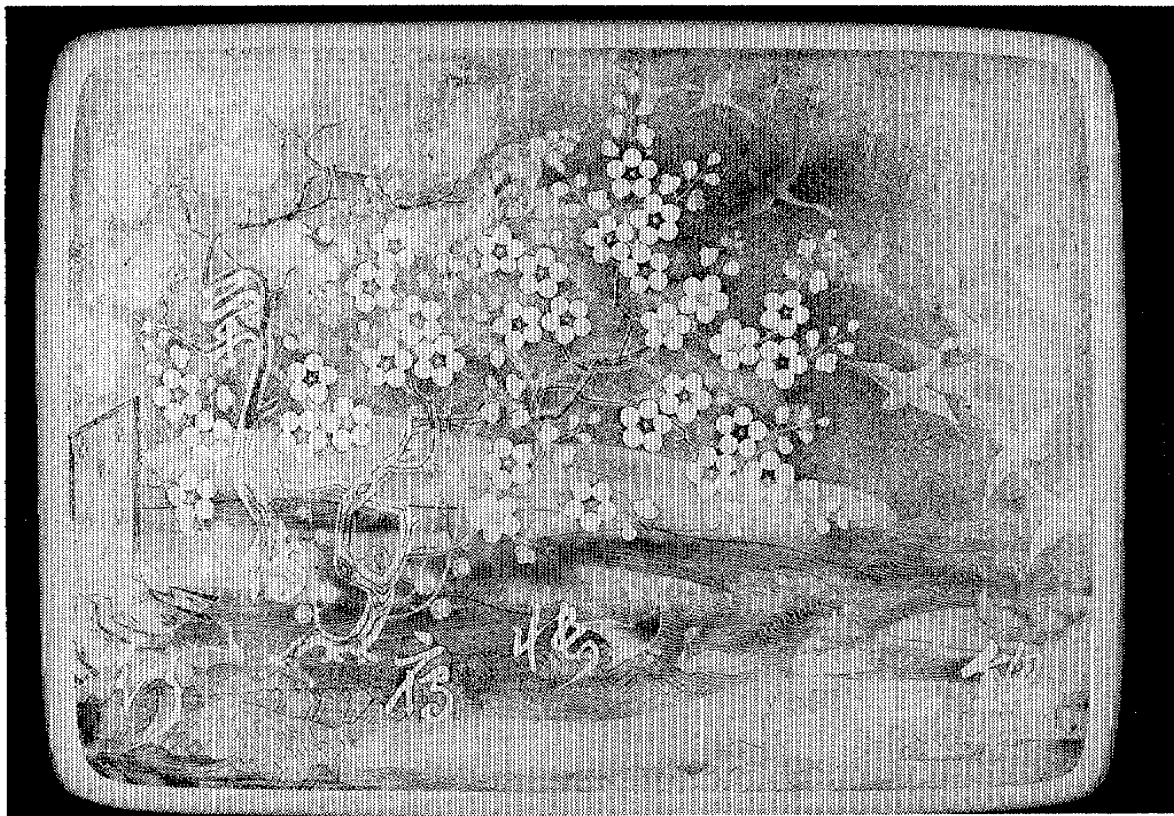
X線透視写真は東文研保存科学部石川陸郎氏の撮影によるものである。

Technical Data on Lacquer Work in the Kamakura Period (I)
A Supplement

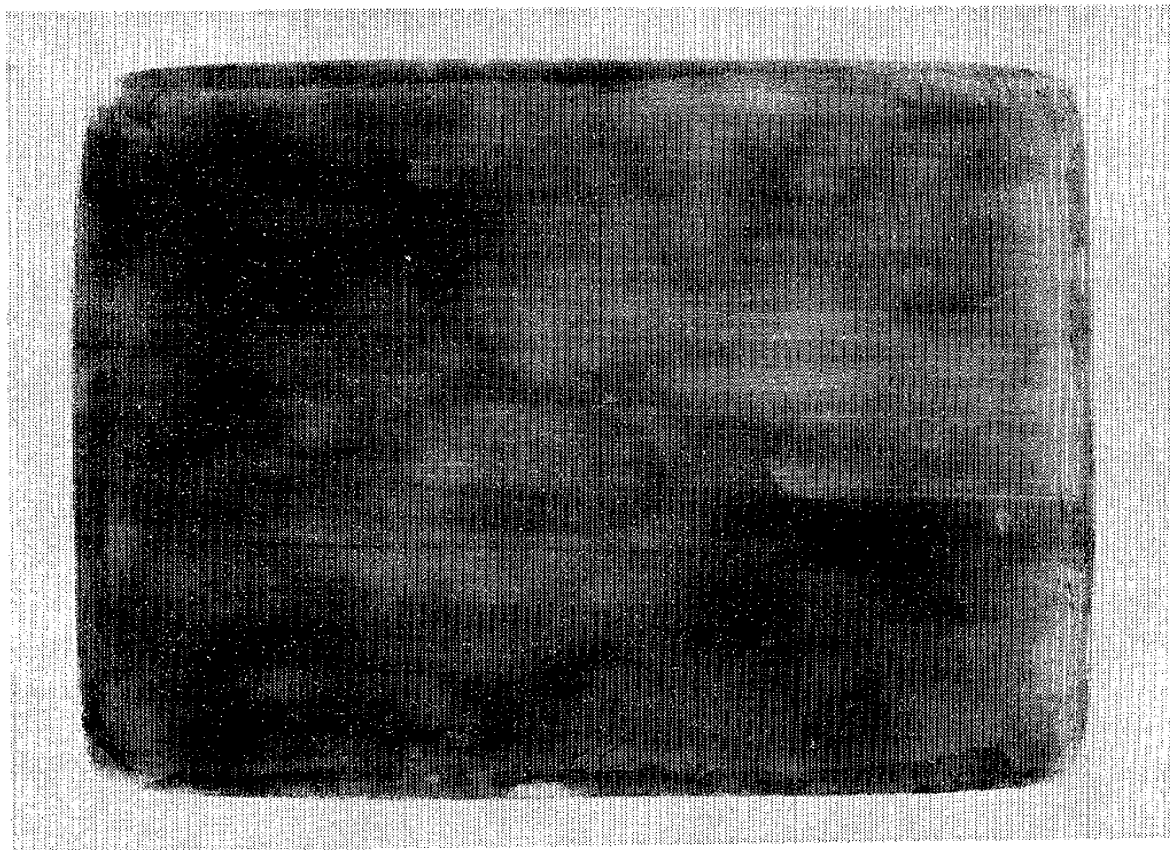
Toshikatsu NAKASATO

This is a supplementary note to an article previously published in *Conservation Science*, volume 25. Since then, a study on the structure and *makie* technique of the *Ume-makie Box* was made by X-ray. Although the X-ray film is not completely clear because of *kinji* or *hirameji* used on the box, some new facts about *nuno-kise*, *makie* technique and *hyōmon* technique have been revealed.

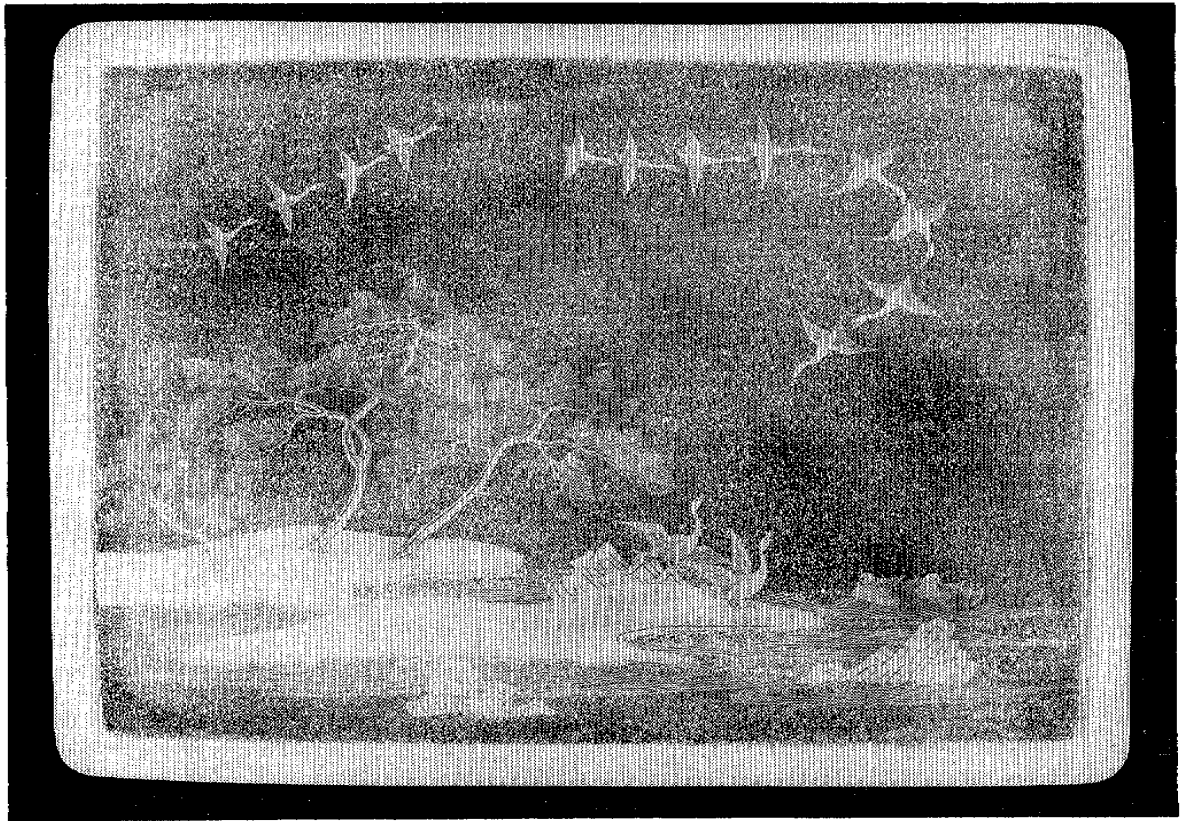
1. *Nuno-kise*: Narrow *nuno-kise* was applied on both flat and inter-locking joints from inside and outside the box. Two pieces of straight boards were joined for the bottom part of the *nakago* no. 2.
2. *Makie* technique: It was found that *kinji* was not used for the *ume* flowers, tree trunk or birds depicted by *taka-makie*. Single-blossomed *ume* flowers without *kinji* are found among double-blossomed *taka-makie ume* flowers.
3. *Hyōmon* technique: *Ume* petals are standardized. They were probably made by stamping out silver plates piece by piece or by piling several sheets of silver plates and cutting them out with a fretsaw.



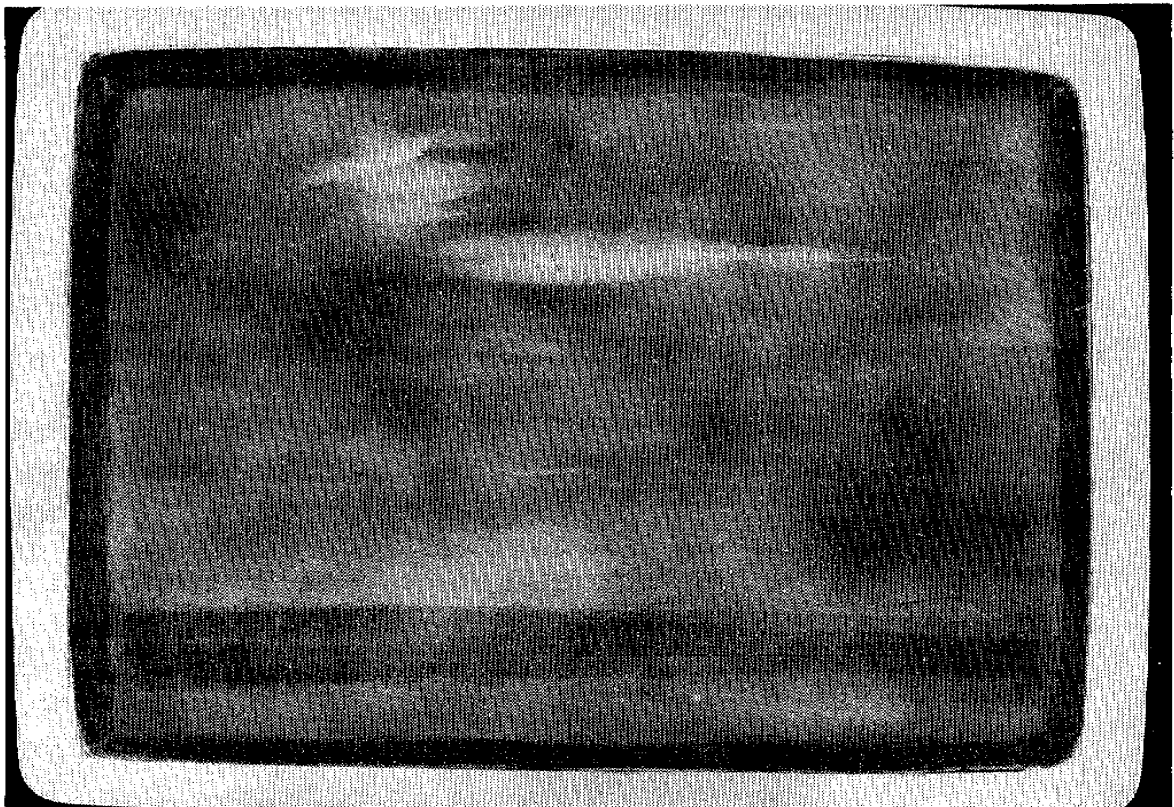
付図一1 梅蒔絵手箱X線透視写真甲面



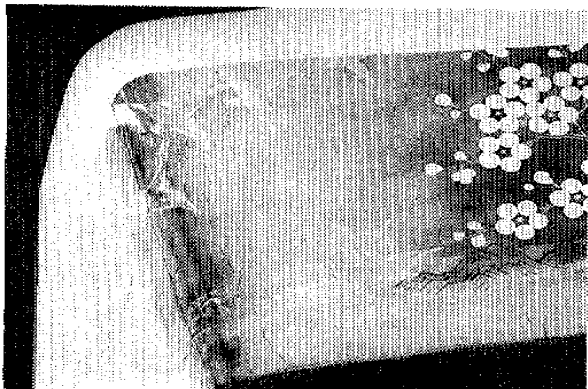
付図一2 同身底面



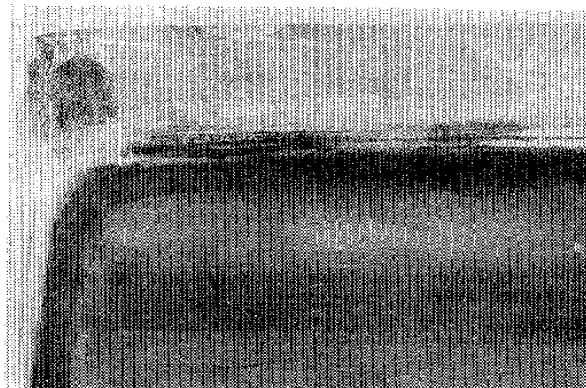
付図-3 同 懸子 (その1) 底面



付図-4 同 懸子 (その2) 底面



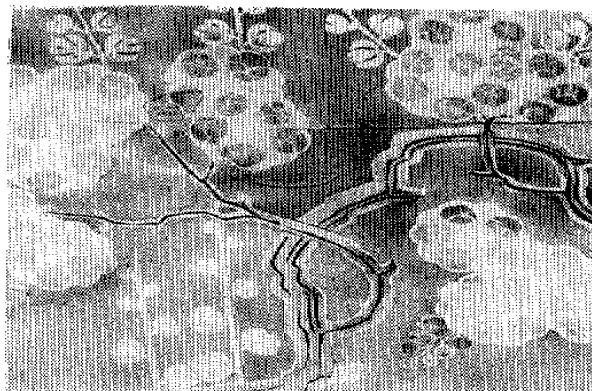
付図—5 同 身側面



付図—6 同 懸子(その2) 底面及側面



付図—7 同 懸子(その1) 底面及側面



付図—8 同 身側面細部